正徹・松平定信各自筆の「住吉百首」について

——解題と翻刻——

稲田利徳

解題篇

一

正徹の家集「草根集」全十五巻のうち、巻一には、いわゆる定数歌の類が十三種まとめて収められている。

この十三種の定数歌を、名称、詠歌年時、詠歌場所に留意して表示すると第Ⅰ表のようになる。

第Ⅰ表

番号	名称	詠歌年時	詠歌場所
①	頓証寺法楽詠六十首	応永21・4・17	細川道欲家
②	詠五十首和歌	応永23・6・19	／
③	詠一夜百首和歌	応永26・10	今川範政家
④	聖廟法楽詠百首和歌	応永27・1・17～23	北野神社
⑤	聖廟法楽詠百首和歌	永享元・12・7～13	北野神社
⑥	詠一日百首和歌	永享3・2・4	畠山持純家
⑦	祇園社法楽詠百首和歌	永享10・6・7	／
⑧	住吉法楽詠百首和歌	永享12・3・18～21	住吉社宝前
⑨	住吉法楽詠百首和歌	永享12・11・27	／
⑩	住吉法楽詠百首和歌	文安6・3・24～27	住吉神前
⑪	侍春日社宝前詠百首和歌	宝徳3・4・21～25	春日社宝前
⑫	侍長谷寺仏前詠五十首	宝徳3・4・2	長谷寺
⑬	侍日吉社宝前詠百首和歌	享徳2・3・6～9	日吉大宮

ところで、この十三種の定数歌のなかには、「草根集」とは別個に独立した伝本がいくつか現存する。

私は昭和四十五年に「『草根集』の定数歌について—独立伝本の位置付けと歌題構成の検討—」[注1]なる拙稿を公表して、独立伝本と「草根集」とを比較し、その位置を確認したことがある。その結果、諸伝本の中には、単に「草根集」巻一から転写したものではなく、それとは系統を異にした伝本の少なからず存することを明らかにした。

その昭和四十五年の時点で、私の調査していた独立伝本は、

①金刀比羅宮社務所蔵「松山短冊帖」中の正徹自筆短冊四枚
②尊経閣文庫本
③なし
④多久市立図書館本・刈谷図書館本・神宮文庫本など十七本
⑤天理図書館本・駒沢大学図書館本・東京大学文学部国文研究室本
⑥なし
⑦続群書類従本
⑧『徳川侯爵家御藏器入札』目録に十三首写真掲載

⑨なし
⑩なし
⑪薬師寺本・内閣文庫蔵「賜蘆拾葉」所収本・春日大社蔵自筆懐紙五首
⑫静嘉堂文庫本
⑬彰考館文庫本・早稲田大学図書館本（二部）

であった。その後、⑤には、香川県の善通寺本（伝正広筆）、⑧には、片山享氏蔵「秋篠月清集」合綴本、『目録』（昭和十六年三月）の三十首写真掲載、などが発見され、拙著『正徹の研究　中世歌人研究』にも触れた。

さらに、これまで独立伝本のなかった、⑩の文安六年の「住吉法楽詠百首和歌」に関しては、田中新一氏が、伊藤白鷗氏筆の法帖仕立の複製本を紹介され、「草根集」とは異なる奥書を検討され、貴重な事実を指摘されている。

二

田中新一氏は「正徹と松平定信—草根集研究余滴—」[注2]なる論考において、愛知教育大学の所蔵となった、松平定信自筆の「草露集」（定信が正徹の「草根集」から秀歌一五三一首を選抄したもの）の内容を詳細に報告されたほか、伊藤白鷗氏旧蔵の複製本の「徹書記住吉百首和謌」および「楽翁公住吉百首和歌」の二帖も紹介された。この「徹書記住吉百首和謌」は先に触れたように、第Ⅰ表⑩に当る百首であった。

私はこの二帖の「住吉百首」の複製本を実見していないが、田中氏論文に記されている久徳高文氏の覚え書きや田中氏の白鷗氏の跋文の要約によって、その輪郭を述べると、次のような性格を有する伝本のようである。

伊藤白鷗氏（昭和十六年一月二十五日没）は、還暦に際して、ある骨董商より「住吉百首」二巻を購入。この二巻は正徹と定信の「住吉百首」であったが、ともに楽翁（定信）の自筆本であった。この百首は、あまり世に知られないことを知り、還暦の賀の記念に印行して、親族知友に配った。「昭和十四年九月十日午后二時執筆同六時了　伊藤白鷗　六十歳」と跋文にある。複製本は「住吉百首和歌」と表題を持つ帙入りの法帖仕立で「徹書記住吉百首和謌」と「楽翁公住吉百首和歌」の二帖からなる。現在、白鷗氏旧蔵の楽翁自筆の原本二巻の所在不明。

ところで、田中氏によると、定信の「住吉百首」には、渋沢栄一氏が昭和二年に書写印行した複製本、『弘文荘名家真蹟圖録』（昭和四十七年六月刊）に掲載の自筆本、渋沢氏が依拠した松平家本などのほか、穂久邇文庫にも正徹・定信の「住吉百首」二巻が所蔵されているとのことである。

これらの諸本に関しては、後に詳述するが、ここで留意したいのは、定信の自筆本「住吉百首」は幾本かあった可能性があること、および、伊藤氏旧蔵本といい、穂久邇文庫本といい、正徹と定信の百首はペアとなって伝えられているということである。

定信の「住吉百首」の奥書によると、彼は文化六年に正徹自筆の「住吉百首」を入手したので、それと同歌題の百首を詠じて奉納しようとしたとある。このことが、正徹、定信の「住吉百首」が二巻として転写されてゆく因となっている。

以上、今日までに明らかにされている、正徹と定信の「住吉百首」の伝本に、ごく簡単に触れてみた。

三

私は昭和五十八年二月十六日、住吉大社権禰宜神武磐彦氏に御世話

願って、「四季物語」「大永歌合」「八雲御抄」などの伝本調査のため住吉大社を訪れた。調査をほぼ終えた段階で、私が中世和歌、特に正徹を研究していることを神武氏にお話したところ、氏は、この住吉大社にも正徹の和歌があることを洩らされた。ぜひ一見したいと御無理を申し上げて、出していただいたものは巻子本一軸で、開いてみると、室町中期の書写で、筆跡からみて、まぎれもなく正徹自筆の文安六年詠出の「住吉百首」であることを確認し、驚嘆したのであった。時間の余裕もなかったので、簡単に書誌的なメモをとり、急ぎ写真撮影をすませて帰った。

その後、田中氏の論文などを読み返しているうちに、住吉大社には松平定信の「住吉百首」も同時に奉納されているのではないかと思い、書簡で神武氏にお尋ねしたところ、やはり定信自筆の「住吉百首」も正徹のものと共に所蔵していること、また「住吉百首和歌」と題簽を付す「故桑名城主松平楽翁公招月庵正徹詠歌百首奉納次第」（以下「奉納次第」と略称）なる冊子本も存するとの御返事をいただいた。さらに、住吉大社の正徹百首は、すでに『神道大系　神社編六、河内・和泉・摂津国』（昭和五十六年三月刊）の「住吉大社資料」の部に翻刻されていると、その部分のコピーも送ってくださった。すでに二年ほど前に出版されていた『神道大系』に正徹百首が翻刻されていることを知らなかったのは大へんに迂闊であった。

『神道大系』（二宮正彦氏執筆か）の解題には、

和歌については、嘉応二年（一一七〇）十月九日、藤原俊成が判者となって当大社で行われた『住吉社歌合』が著名であるが、これは『群書類従』にも収録されているので、本書では「住吉百首和歌」を掲載した。その奥書によって知られる通り、室町時代の歌人正徹（号は招月・松月）は、文安六年（一四四九）三月に住吉大社に参籠し、百首の和歌を奉納したのであるが、その後文化六年（一八〇九）、偶然にもこの歌集は松平定信の入手するところとなり、再度当大社に奉納されたのである。定信は正徹と同じ題で百首の和歌を詠み、これに添えて奉納したので、同書は二巻となっている。

と説明してある。

しかし、『神道大系』の翻刻と正徹自筆の「住吉百首」を比較してみると、とても正徹自筆本に直接依拠して翻刻したとは思えない不審な箇所が目立った。

まず第一に『神道大系』は平仮名・片仮名を厳密に区別して翻刻しているが、自筆本が片仮名であるのに『神道大系』で平仮名になっているところが、三十六箇所ばかり、その逆も二箇所あること。第二には自筆本では仮名表記なのに、『神道大系』で漢字表記になっている箇所が三十六ばかり、その逆も三箇所あること。第三には意味が通じがたく、誤刻または誤植かと思われる箇所が二十箇所余りあり、奥書にも不審な読みが十数箇所あること。その他、踊り字の不一致も少なからずあった。

以上のように『神道大系』の翻刻は、とても正徹自筆本に直接依拠したとは思えないと不審を抱いていた。その後、『神道大系』の翻刻は、やはり正徹自筆本に直接よったのではなく、自筆本をもとに、嘉永四年に転写した「奉納次第」所収の「住吉百首」によっていることを神武氏よりお聞きし、先の不審は晴れたのであった（最も、「奉納次第」のそれと『神道大系』の翻刻を比較してみると、『神道大系』には、かなりの誤刻がある）。

そこで昭和五十八年六月十六日、私は再び住吉大社を訪れ、今度は定信自筆の「住吉百首」や「奉納次第」を調査、写真撮影するとともに、正徹の百首の方も再調査した。

以下、その調査結果を報告する。

四

最初に、正徹・定信の「住吉百首」二巻が、いつ、どのような手順

で住吉大社に奉納されたかをたどっておく。

先にも触れたように、住吉御文庫本甲種のなかに、二巻の奉納次第を詳細に整理した冊子本が現存する。縦二六・九糎、横一九・二糎の袋綴で、楮紙墨付三十丁からなる写本一冊である。表紙左肩に「住吉百首和歌 全」と白色紙題簽を貼付し、右肩に「故桑名城主松平楽翁公招月菴正徹詠歌百首奉納次第」と打付書きがある。内容は最初に「住吉百首和歌」と題して、正徹の百首を、和歌一首一行書き、一面十行に書写し、ついで「住吉百首和歌」と題して、定信の百首を、和歌一首一行書き、一面十一行に転写している。『神道大系』はこの転写本を底本に翻刻したわけである。

次には、奉納の際に添えられていた大檀紙目録二通を転写し、さらに二巻が収められていた二重の箱と唐櫃などを絵図に写し、箱に書かれた文字、箱の種類とその寸法にいたるまで詳細に調査記入してある。また、定信の百首の巻頭歌や奥書、正徹の巻頭部分を各々に臨写したり、二巻の書誌的事項も書き入れている。奥書には、

右並河先生より恩借令書寫之
嘉永四辛亥年十一月
明治三十六年五月
御文庫奉納
鹿田松雲堂

とあるが、この「奉納次第」は嘉永四年（一八五一）十一月の書写にかかるものであり、その本を明治三十六年に「鹿田松雲堂」が住吉大社御文庫に奉納したものである（因みに、鹿田松雲堂は多数の本を御文庫に奉納している由）。

ところで、「奉納次第」に記録されている唐櫃・箱・目録などは、奉納時のものが、今も住吉大社にそのまま残っている。唐櫃や二つの内箱の寸法その他についてはここでは詳しく記さないが、二巻の百首を、かくも厳重、丁重に収めて奉納しているところからみて、松平家にとって、この二巻、とりわけ正徹の自筆百首が、いかに貴重な宝物であったかを側面から察知せしめる。

檀紙の筆者目録によると、二巻は「東福寺書記招月菴正徹筆」と「故白河城主松平越中守源定信致仕楽翁書」として各自筆なることを示し、さらに「外題筆者」は、松平城主真田信濃守滋野幸貫（定信の二男。文化十二年十月、信濃松代藩主真田幸専の養子）、「内箱銘書」は、松山世子板倉勝静（定信の孫。備中松山藩主板倉勝職の養子）、「唐櫃銘書」は、桑名城主松平越中守源定猷」（定信の曾孫。弘化三年十二月越中守に叙任）の、各々の筆跡であるとする。まさに松平家三代にわたる人物をくりだしての奉納であった。

さらに、大檀紙折紙には次のような奉納次第が記されている。

東福寺書記正徹和歌一巻
松平越中守定信和歌一巻
雄劔　一振
龍馬　一蹄
右者摂津國住吉神社江被致」奉納候早此徹書記巻軸」奥書之旨ニしたかひ定信も」其歌題ニよりて出詠所被」致ニ候旦又書記之一軸旧來」之表装相用ひ自歌之巻物」表帋ハしのふ摺之古風に」ならひ被製候所ニて永く」神庫ニ被相納候本意ニ候条」可然御取斗有之度頼」被存候筆者目録一通」相添申候是等之趣」宜申入旨被申付如斯」御座候　恐〻謹言

弘化四年丁未　　松平越中守内　　田内主税
八月　　輔（花押）
田井忠左衛門

元陳（花押）
加治啓次郎
禎胤（花押）

この檀紙折紙の奉納次第によると、松平家から住吉大社に奉納されたものは、正徹・定信の「住吉百首」二巻のほかに、雄劍と龍馬も同時に奉納されていることになる。また、正徹の軸物の表装は旧来のままにし、定信の表装は信夫摺を用いたとする。奉納時は弘化四年（一八四七）ということなので、定信が文政十二年（一八二九）五月十三日に死亡してから、およそ十八年後になる。因みに添状の筆頭の「田内主税」とは、定信公の侍臣田内親輔のことである。

定信の百首の奥書によると、文化六年十二月に「住吉百首」を詠じ、そのまま奉納すべき意向を示しているが、彼の生前にその通り奉納が実施されたかどうかは疑問である。

この二巻が、これまで和歌研究者の目に触れなかったのは、神武氏の私信によると、昭和八年刊行の『住吉大社御文庫貴重圖書目録』にも掲載されることなく、昭和五十二年住吉文華館展示のため、大阪市立博物館に調査されるまで、住吉大社に秘蔵されていたためであるとのことであった。

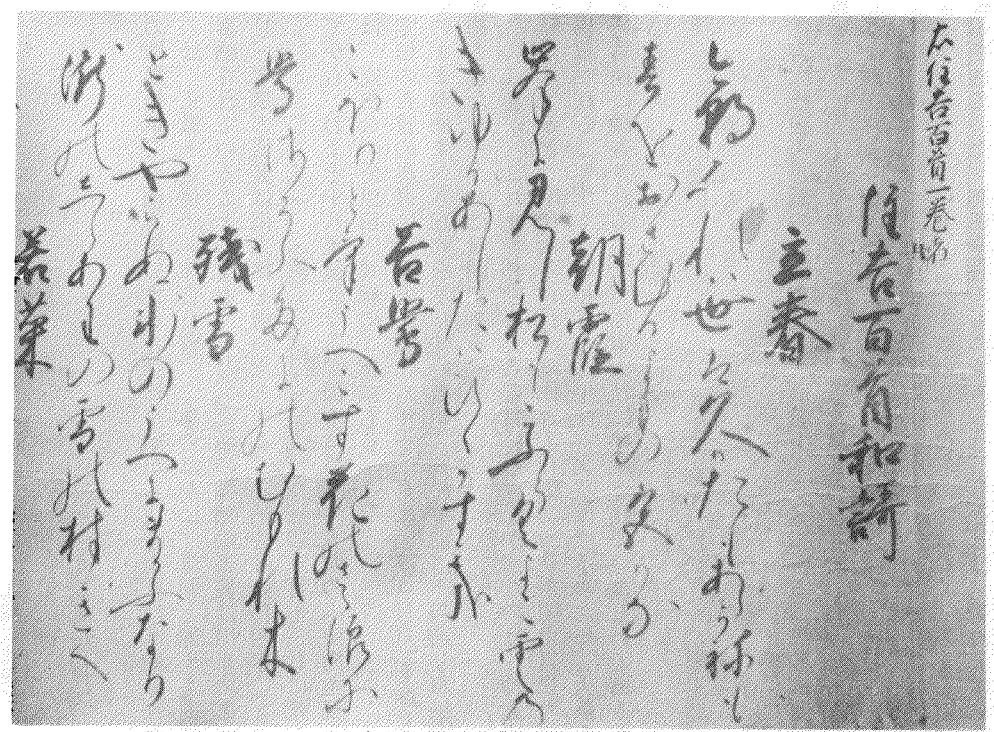
五

住吉大社蔵の正徹の「住吉百首」は巻子本一軸である。表装は茶地模様入りの緞子織物を用いている。これは正徹書写時の表装であるかどうかわからないが、添状にあるように「旧來之表装」で古色をおびている。軸は象牙で紐は紫色。表題は金布目紙に「住吉神社奉納和歌正徹」と記されている。この筆跡は正徹のものではなく、筆者目録に指示されていた、真田幸貫のものであろう。見返しは、青海波に白菊などの絵、又、金銀の砂子、切箔散し。巻頭に「右住吉百首一巻者□」と白色紙を貼付（これは後人の手になるもの）。紙高は二六・三糎。本来冊子本であったのを巻子本に仕立て直したのではないが、裏打ちをするときであろうか、全体十九枚の紙を継ぎ合わせている。その紙の横巾は、四一・五糎、四三糎、三五・五糎などと必ずしも一定しない。各紙の右下の隅に小さく番号を紙背からつけているが、これも裏打ちのときのものであろう。紙と紙との継目に文字を記しているところもかなりあるが、墨色がうまくつながっていないところや墨が連続していないところがあるのも、裏打ちの際、全体を十九枚に切断し、あとで継ぎ合せた過程を示しているのであろう。紙面は所々に虫損の跡があり、また文字も摩滅しかかった所もある。和歌一首を二行書きにし、歌題は三～四字下りに書写。紙質からみても書体からみても、室町中期の書写であり、かつ現存する正徹の自筆懐紙や短冊と比較しても、伝来通り正徹自筆と認めてよい（巻頭に「春二十首」がみえないのは不審）。

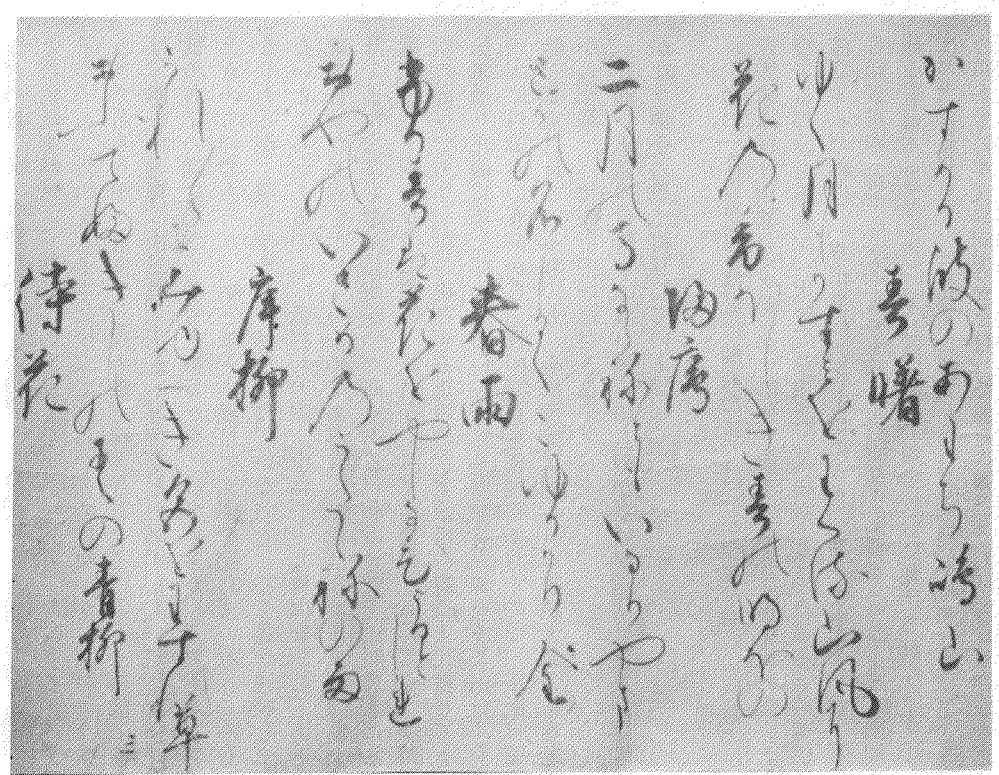
次に自筆本の春部から二枚の写真を掲載しておくので、正徹自筆懐紙と認定されているものと（小松茂美氏編『日本書蹟大鑑』（巻七）から転載）、比較していただきたい。

普通、正徹の自筆本は濃い墨質のものが多いが、住吉大社の百首は、かなり薄手の墨で書写している。

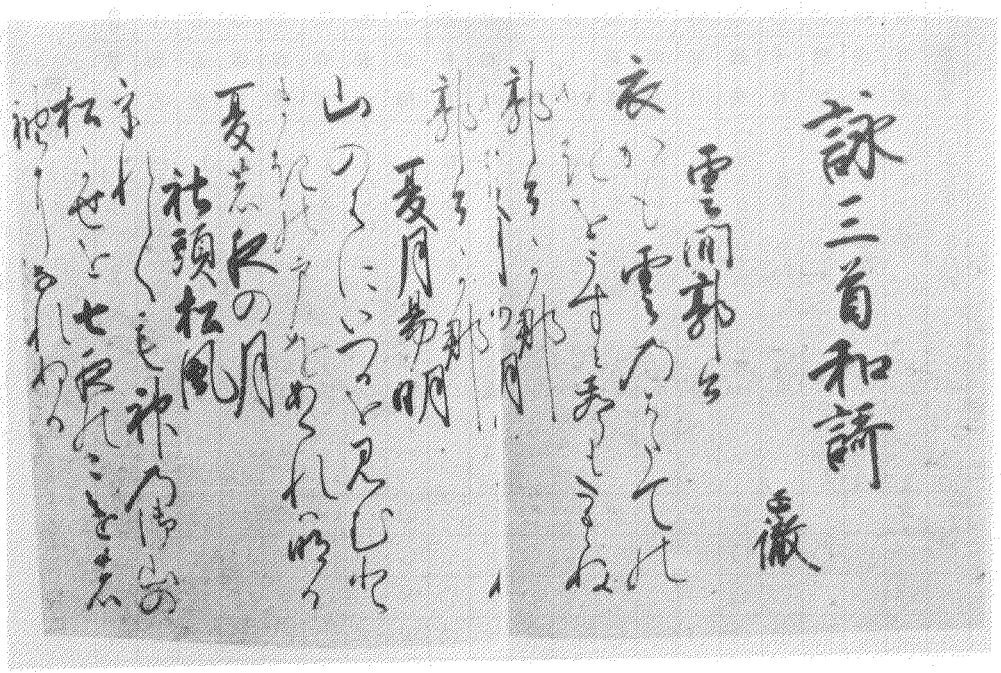
正徹の「住吉百首」は先に触れたように「草根集」巻一に収録の「住吉法楽詠百首和歌」（文安六年）の独立伝本である。田中氏の調査と重複する部分もあるが、次に「草根集」系統本とこの自筆本との関係を確認するために、「草根集」の各系統のうち、巻一を有するものから、丹鶴叢書本（版本による―略号を丹）、書陵部十七冊本（略号―書）、内閣文庫十五冊本（略号―内）、それに丹鶴叢書の校合に使用された一本（これは原本が現存しないので、丹鶴本に校合されている範囲だけで判断せざるをえない）の四本との本文異同調査を行ってみた。そのうち明らかな誤脱などを



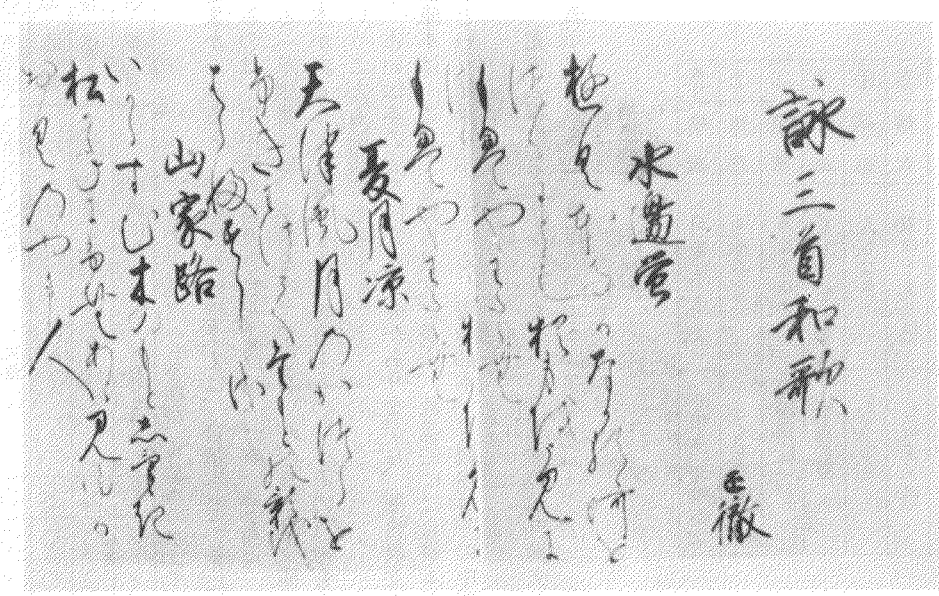
（住吉大社蔵「住吉百首」）



（住吉大社蔵「住吉百首」）



（『日本書蹟大鑑』第七巻より転載）



（『日本書蹟大鑑』第七巻より転載）

除き、異同を表示すると第II表のようになる。

第II表

番号	歌題	本文異同	内	一本	書	丹
①	朝霞	○松もこふらく　×か	○	×	○	×
②	若菜	○わかなつむの、　×も	○	×	×	×
③	春月	○かすめる波の　×に	×	○	○	○
④	春曙	○ゆく月も　×に	○	○	×	○
⑤	春雨	○ふる春は　×程	×	○	○	○
⑥	春雨	○うたゝねの雨　×ゆめ	○	○	○	×
⑦	岸柳	○みゆへき色を　×物	○	○	×	×
⑧	暮春	○春のなこりを　×に	×	○	○	○
⑨	鵜川	○つなてくるしき　×縄	○	×	×	×
⑩	夏祓	○みそきすらしも　×す	○	○	○	×
⑪	七夕	○秋さりころも　×々	○	○	×	○
⑫	萩露	○なにそハしける　×を	×	○	○	○
⑬	河月	○わたるらん　×かは	×	○	○	○
⑭	浦月	○影をやとせる　×残	×	○	○	○
⑮	籬菊	○せきとならすや　×は	×	○	○	○
⑯	千鳥	○千鳥なくらん　×也	×	○	○	○
⑰	鷹狩	○一も鳥をいかて　×一もいかて鳥も	×	○	○	○
⑱	浅雪	○ハるゝしら雪　×雪哉	×	○	○	○
⑲	寄月恋	○うれへみる　×ぬ	×	○	○	○
⑳	寄関恋	○まもりくきたの　×る	○	○	×	×
㉑	寄関恋	○関のくきぬき　×草	○	○	×	×
㉒	水郷	○みつのおもに　×うへ	×	○	○	○
㉓	述懐	○ほまれある名　×世	×	○	○	○
㉔	祝言	○たくひ成けり　×る	○	×	×	×

（○印が、自筆本の本文である）

この結果からみると、数量的な処理上では、自筆本に一番近似の本文を有するのは、田中氏も言及されたように「一本」である。この系統に属する「草根集」は、全巻そろっていないが、尊経閣文庫に現存最古の写本があるなど、有力な本文を有するので、その点でも自筆本に近いということも納得できる。

一方、古い伝本の姿を伝える部分がありながら、独自異文の目立つ内閣文庫本は、ここでも独自異文が多く、数量的には自筆本から一番離れるという結果を示している。書陵部本、丹鶴本はその中間に位置する。

次に、先の「草根集」諸本に見えない、自筆本の独自異文の主たるものを表示してみると、第III表のようになる。

第III表

番号	歌題	自筆本本文	「草根集」諸本本文
①	初花	をそくとく	とくをそく
②	早苗	みなと田の	湊田に
③	夕虫	むしのこゑ哉	松虫の聲
④	擣衣	人もなき	人そなき
⑤	擣衣	道ゆくまゝに	朽行まゝに
⑥	暁霧	みねたかく	ミねちかく

⑦	落葉	空の木の葉の
⑧	田家	もる民も
⑨	述懐	月もうき雲

空ハ木の葉の
もる民ハ
月にうきくも

なお、田中氏は白鷗氏の複製本にみられる独自異文とし（上が複製本、下が「草根集」諸本の本文）、

①水鳥「いか斗寒けき床そ」―「いか斗さえけむ床そ」
②鷹狩「一鷹鳥をいかてたてまし」―「ひとつも鳥をいかてたてまし」
③寄虫恋「むしのねかへす秋の霜」―「虫のねからす秋の霜」
④海路「なくは見もせぬ瀬戸わたる舟」―「なくは見もせんせと渡る舟」

の四つも表示されているが、これを自筆本に当ってみると、①「寒けむ」（「さえけむ」と読むのであろう）、②「一も鳥を」、③「からす」、④「見もせむ」とあり、いずれも「草根集」諸本の本文と同じである。だから先の四箇所は、白鷗氏複製本にいたる、どこかの段階で誤写したものであろう。

また、雑歌の部で「草根集」諸本では「山家水」「山家嵐」と歌題配列がなされているのに反して、自筆本では「山家嵐」「山家水」と逆になっている。が、この歌題構成は、「草根集」巻一にある、永享十二年十一月の「住吉法楽詠百首和歌」と同じであり、そこでは自筆本と同じ「山家嵐」「山家水」となっているので、自筆本の配列が本来のものであったと思う。

自筆本の独自異文のなかでは、①③⑤⑥が意味からみて看過できない異文であるが、特に①③は単純な誤写によって生じたものとは思えない。後述する奥書なども勘案すると、自筆本は、田中氏もいわれるように、「草根集」巻一に収録する以前の奉納時の本文を伝えているのかもしれない。

さて、正徹自筆本の「住吉百首」と「草根集」巻一のそれを比較して、一番異同のあるのは、その奥書である。「草根集」の奥書は次のようになっている。

自文安六年三月廿三日参籠侍　住吉神前一日三時詠之自廿四日夕方十五首詠廿五日依他事一向不詠廿六日六十首詠之廿七日廿五首詠終彼是一日三時百首也

これは丹鶴叢書版本によったが、書・内・一本にも異文はない。

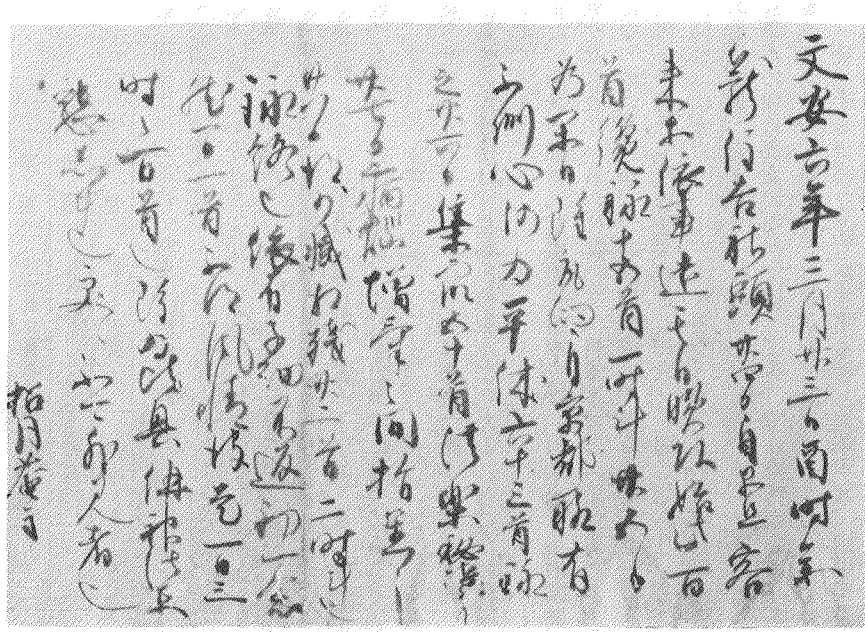
これに対し正徹自筆本は、その詠歌日や詠歌歌数に異同がある。この奥書には難読な文字もあるので、写真を掲載しておくので、比較参照してほしい。さらに参考のために「奉納次第」によられた『神道大系』の奥書翻刻と白鷗氏複製本によられた田中氏の翻刻も合せて紹介し、不審と思われる文字には、私に傍点を付しておいた。

文安六年三月廿三日酉時参籠住吉社頭、廿四日自早旦客來等依事、逮其日晩、取始此百首、僅詠十五首一時斗、廿五日爲閑日雖取向自京都聊有名例心、仍爲平休六十三首詠之、廿六日集衆五十首法樂祕講、廿七日病脳増気之間措置之、廿八日得少憾相殘二十二首二時斗也詠終也。依有子細不返初一念、然者一首名得風情彼是一日三時之百首也。雖爲比興併神法樂懇志計也。更々不可外見者也。

松月菴主

（『神道大系』返り点省略）

文安六年三月廿三日酉時参籠住吉社頭廿四日自早旦客来等依事違其日晩頃始此百首纔詠十五首一時斗廿五日為閑日隆明向自京都聊有不例心仍乃平休六十三首詠之廿六日集衆五十首法楽秘法廿七日病脳増気之間指置也廿八日得少暇等残廿二首二時斗也詠終也依右子細不返初一念然間一首不得風情彼是一日三時百首也随干比興併初法楽懇志斗也更々不可外見者也



（住吉大社蔵「住吉百首」奥書）

招月庵主

（白鷗氏複製本による田中氏の翻刻）

完璧をきした自信はないが、自筆本による私の判読は以下の通りである。

文安六年三月廿三日酉時參
籠住吉社頭廿四日自早旦客
來等依事違其日晩頃始此百
首纔詠十五首一時斗廿五日
爲閑日雖取向自京都聊有
不例心仍爲平休六十三首詠
之廿六日集衆五十首法樂秘講図
廿七日病悩増気之間指置之
廿八日得少減相殘廿二首二時斗也
詠終也依有子細不返初一念
然間一首不得風情彼是一日三
時之百首也雖為比興併神法樂
懇志斗也更〻不可外見者也
招月菴主

ここで「草根集」の奥書と正徹自筆本の奥書を整理してみると、互に次のような齟齬が出てくる。

〈草根集〉
廿三日　住吉參籠
廿四日　十五首詠出
廿五日　（不詠）
廿六日　六十首詠出
廿七日　二十五首詠出

〈住吉大社蔵自筆本〉
廿三日　住吉參籠
廿四日　十五首詠出
廿五日　六十三首詠出
廿六日　（五十首法楽）
廿七日（不詠）
廿八日　二十二首詠出

かかる詠歌日と詠歌歌数の不一致が生じているのは、まことに不審で

ある。このことは、すでに田中氏が「草根集」（巻七）の宝徳元年（文安六年）三月下旬の頃にある、

○自廿三日夕住吉神前に参籠その間詠百首和歌在別紙
○同廿六日泉堺より少々人をやとひて五十首の法樂をたてまつりしに
○廿七日量阿といふもの廿首の法樂せしを百首を（ナシ一本）詠するいとまなくて只一首結縁せし

の詞書により、二十六日は人々と別途に五十首法樂を詠じたこと、二十七日は量阿の二十首法樂に一首だけ結縁歌を詠じて、百首（住吉百首）を詠出しなかったことが判明するので、自筆本の奥書が事実を伝えていると断定された通りだと思う。「草根集」の奥書は、各日の詠歌歌数なども、十五・六十・二十五（自筆本は、十五・六十三・二十二）と端数を切り捨てて五首単位にわりきった歌数にしていたりして作為があるようだ。二十六日も二十五日、二十七日も二十八日とあるべきで、どこかで記憶を誤っていたものであろうか。「草根集」の奥書が正徹自身の手になるものか、編者正広の手になるものか、そのあたりの判断は難しいところである。

ただ、このような事実は「草根集」には他にもあり、かって香川県の常徳寺で発見された新資料「永享六年正徹詠草」と「草根集」巻三の永享六年の条を比較すると、詠歌月日や詠歌場所の食い違うところが少なからずでてきたが、多くは「草根集」の方が誤っていたということも確認されている。このように「草根集」の日次詠草の年月日や詠歌場所は必ずしも百パーセント信用できない面もあることは留意しておくべきであろう。

以上からみると、住吉大社の正徹自筆の「住吉百首」は、その臨場感のある詳細な奥書からみて、「草根集」に収録される以前の奉納本系統に属する伝本とみてよかろう。また、この自筆本一軸は、かって文安六年に正徹が住吉大社に奉納したそのものという可能性もなくはないが、今はそこまで断定できない。

正徹の筆になる書写本はいくつか現存しているが、自身の詠草の自筆本といえば、大東急記念文庫蔵の「永享九年正徹詠草」が最も貴重なものである。しかし、この年の詠草はまとまって「草根集」に収録されていない。その点、「草根集」巻一の百首ではあるが、「草根集」関係の自筆本が出現したことは始めてのことであり、極めて貴重な資料である。

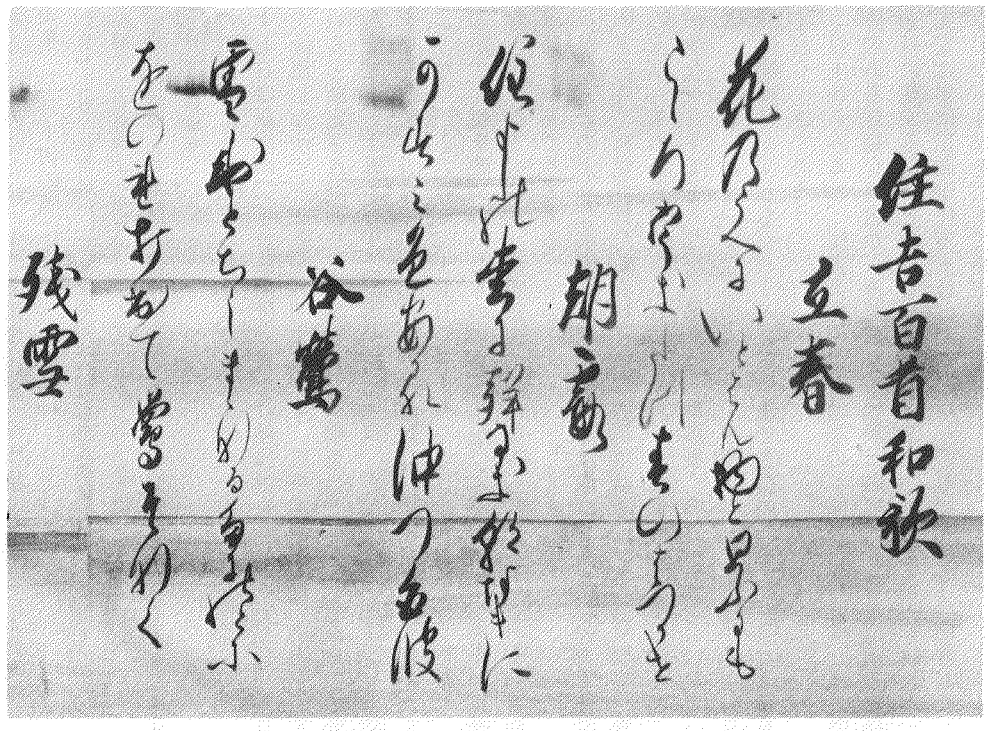
六

次に住吉大社蔵の定信の「住吉百首」を紹介する。「住吉百首」は巻子本一軸。表装は添状にあったように信夫摺を用いている。外題は「住吉神社奉納百首和歌」とあるが、この筆者も正徹のそれと同様、定信二男の真田幸貫であろう。紙高は二六・三糎で料紙には全体に金・銀・緑色などの流し模様が薄く彩色されている。書写は奥書にいうように文化頃のものとみてよい。定信の筆跡はかなり特徴がある。今、巻頭と巻軸部分の二枚を写真で掲載しておく。

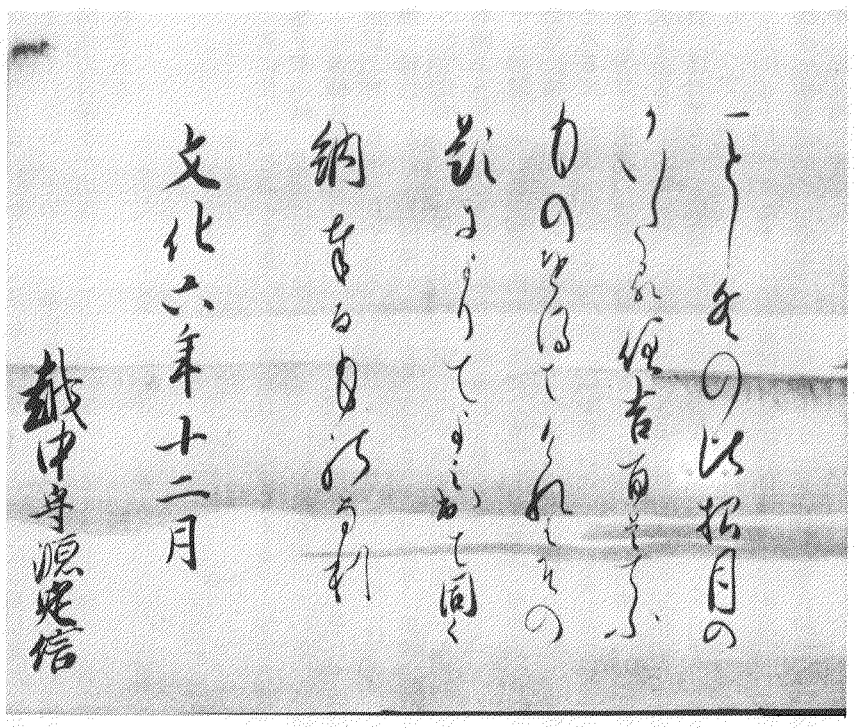
この筆跡を、渋沢栄一氏著『樂翁公傳』（岩波書店・昭和十二年刊）に豊富に掲載されている、子爵松平定晴氏蔵の定信自筆の筆跡と比較してみるに、同筆とみてよい。特に『樂翁公餘影』（樂翁公遺德顕彰會・昭和四年刊）に掲載の樂翁の自筆短冊とは、和歌一首二行書という同形書式であることもあって、筆跡は一致する。住吉大社の定信の「住吉百首」は自筆とみて間違いなかろう（定信の子息たちが、父の自筆として奉納しているのだから、その点でも疑うまでもない）。

先にも少し触れたように、定信の「住吉百首」は、渋沢栄一氏の複製本、伊藤白鷗氏旧蔵本とその複製本、『弘文荘名家真蹟圖録』掲出本、穂久邇文庫本などがある。

渋沢氏の複製本は、大阪府立中之島図書館で実見したので、今、それによって複製の由来を摘記しておく。渋沢氏の序文によると、自分



（住吉大社蔵「住吉百首」）



（住吉大社蔵「住吉百首」）

は定信自筆の「草露集」を秘蔵しており、かねてから定信の和歌に関心をもっていたが、「近頃公に住吉神社奉納百首の詠ありて其写本松平子爵家に蔵せらるゝと聞き借り受けて打誦するにいと面白ければ老筆をもて書写印行して今年の霊祭の記念に同志の人々に分むとす」と印行の動機や依拠本に触れている。時に「昭和二年丁卯五月」と記してある。即ち、渋沢氏の複製本の親本は、松平子爵家本によっているが、それが定信の自筆本なのか、その転写本なのかについては触れていない。

『樂翁公傳』によると、公の侍臣田内親輔の調査による「守國公御著述目録」に百三十八部を掲げ、その中に「住吉社頭御奉納和歌百首」があり、「右四十八部、致仕し給ひし後の御筆記ども也」とあることを勘案すると、渋沢氏の依拠した松平子爵家本も定信自筆であった可能性がある。

この渋沢氏の複製本と住吉大社本とを比較してみると、片仮名、平仮名の相違、漢字表記か仮名表記か、送り仮名の有無などは相当に違っているが（渋沢氏が転写の際に改められた所もあろう）、異文はほとんどなく、両本は同系統とみなしてよい（歌題で、「春曙」とあるべきところを、渋沢氏複製本は、「春照」としているが、これは転写の際の誤写か）。

田中氏によると、巻末歌と奥書が諸本の分岐点になるということなので、それを示しておく。

祝

あひにあふ神と君との恵にていつこも
ひとつすみよしの里
ことし冬の頃招月のかいたる住吉百
首てふものを得てけれはその題によ
りてよミ出て同く納奉るものなり
文化六年十二月
越中守源定信

一方、白鷗氏複製本の巻末歌は、

祝言

あひにあふ神と君との恵にていつこもひとつすみよしの松

とあり、傍点部分が渋沢氏複製本と相違があるという（他にも、二、三の異同があるが、誤写の範囲を出るものでない由）。

また、『弘文荘名家真蹟圖録』（昭和四十七年六月刊）には、「御相談之覚」（松平子爵家旧蔵）、「草露集」、「花月日記」、「住吉百首」と四つもの定信自筆本を掲載し、部分写真も掲げている。「住吉百首」に関しては「松平楽翁自筆原本、文化二年成」とし「半紙判十六枚。僧正徹の住吉百首の題によって、自ら百首を詠じて、住吉社に奉納したものの控え。」と解説し、巻頭部三首と巻軸部三首と奥書を写真版で掲げてある。これと住吉大社の定信自筆本の筆跡とを比較してみると、一見したところでは同筆とは思えない感じを受ける。『圖録』掲載の四つの自筆本の中では、松平子爵家旧蔵という「御相談之覚」が住吉大社本の筆跡に一番近い。「草露集」の筆跡も一見、住吉大社本の筆跡と違った感じを受ける。が、これは、住吉大社の巻子本のように、先のやや太い筆で大きな文字で書写したのと、速筆で細字で書写したために生じた相違によるものかもしれず、一字一字比較してみると近似の筆跡もみえる。実物を見ていないので断定は出来ないが、『圖録』のいうように自筆本とみてよいのかもしれない。田中氏は「写書版ではあるがその筆跡からみて定信の自筆であることはほぼ間違いない。」とされている。

『圖録』掲載の「住吉百首」の写真部分の六首と奥書を、住吉大社の自筆本と比べると、「谷鶯」の歌題歌は、住吉大社本では「雪氷とちしまゝなるたにのとに」とあるが、『圖録』本の方は「たにの上に」と異同がある。これは「とちし」の縁語として「と（戸）に」がよく、和歌史の表現の伝統からみても「鶯」と「谷の戸」はよく結合してよまれているので、「たにの上に」は妥当な本文とはいえない。「と」

を「上」と誤写した可能性がある。

さらに重要な相違は、住吉大社の自筆本奥書で「ことし冬の比」とあるのが、『圖録』本では「ことし夏の比」となっているところである。田中氏は、文化六年十二月に書写していながら「ことし冬の比」というのは不自然な表現で、冬であれば「この冬」とか「この冬の初め」など「この」という代名詞で表わすべきところであるが、その点『圖録』本の方なれば、自然であるとされた。

また、書写年代が『圖録』では「文化二年」とあり、解説も「文化二年」としているように「六年」という奥書本のあることを知らなければ、とても「六年」とよめず、「二年」とみる方が自然である。田中氏は「六」を引きのばして「年」に書き継いでいるともとれるので、他本がどれも「六年」なので、そうみる方が妥当なのかもしれないとされる。確かに無理にとれば読めなくはない。

田中氏は『圖録』本をB、松平家本をA、渋沢氏転写本をA′、伊藤白鷗氏旧蔵本をC、その転写本をC′として、次のような系統図を想定された。

そして論文脱稿後に調査された穂久邇文庫本は「定信自筆転写本」(推定系統図A本)あるいはその直接転写本と見るべきもので、所論を補強しうる内容を持っているので、いずれ別稿に触れたいとされている。

以上のようにたどってくると、定信の「住吉百首」には幾本かの自筆本があったようであり、住吉大社の自筆本は渋沢氏の複製本と同一系統なので、松平家本も同系統といえる。白鷗氏旧蔵本が、はたして定信自筆の清書奉納本であったかどうかは、現在所在がわからないので確認できないが、ただ、住吉大社に奉納されていたものが、再び巷間に出たものであるかどうかは疑問である。また、弘化四年に奉納された正徹・定信各自筆本は、昭和五十二年の調査まで大社に秘蔵されていたのだから、これまた昭和二年に渋沢氏が借りた松平家本とは別のものとみなければならない。

要するに、定信の「住吉百首」は自筆本が幾本かあったこと、その奥書にいうように、文化六年十二月以降まもなく住吉大社に奉納したかどうか問題があること、彼の死後、十八年たった弘化四年に遺族が正徹の自筆本とともに、定信自筆本も奉納したことなどが判明した。

なお『國書総目録』の松平定信の「住吉百首」の項には、「文化二」の成立として、松宇文庫(明治写)、羽中八幡文庫(天保三五弓久範写)、桑名松平家の三つの諸本のあること、活字になったものとして『楽翁公遺書中』(未見)のあることを指示している。

注1. 広島大学文学部紀要　第二十九巻一号、昭45・3。
注2. 愛知教育大学研究報告　第二十四輯、昭50・3。

翻刻篇

住吉大社蔵の正徹・定信各自筆の「住吉百首」を翻刻する。翻刻の力点は正徹の百首の方にあるが、定信の方も、よい機会なので、あわせて翻刻してみた。

翻刻方針は、片仮名、平仮名の区別をはじめ、旧字体、略字体、異体字などもできるだけ原本の姿を伝えるように努めた。ただ、歌題は正徹の方は三字下り、定信の方は四字下りに統一した。

〈正徹の「住吉百首」〉

住吉百首和謌

立春

今朝みれハ世は久かたもあらかねも
春をおさむるよもの色かな

朝霞

峯に見し松もこふらくよこ雲の
きゆるあしたハひくかすミ哉

谷鶯

こほりとけうへこす花のさゝ浪に
鶯さそふたにのむもれ木

殘雪

ときやらぬ氷のうへにまかふなり
瀧のしらあわの雪の村きへ

若菜

人めより古葉ハかれぬ朝ことに
わかなつむのゝ雪さむくして

里梅

むめかゝもえやさそハれむ猶さりに
さとゝひすつる春の山かせ

簷梅

身にそしむ軒の忍もさく梅の
花に色つく春の秋かせ

春月

月にたにうかひそ出ぬおきつしほ
かすめる波のあわち嶋山

春曙

ゆく月もかすミをわくる山風に
花の香ほしき春の明ほの

帰鴈

二月の馬ならねともいなりやま
さかの名しるくこゆるかり金

春雨

ふる春は花をやしなひうるとしれ
おやのいさめのうたゝねの雨

岸柳

かれ〳〵にみゆへき色をわすれ草
おふてふきしの春の青柳

待花

みなと舟追手なきさのうきねより
猶いそかるゝ山さくらかな

初花

をそくとく世ハさま〳〵にまつ人も
心そろハぬ花のした紐

見花

こゑそうき花をみるめの前わたり
かこたむとすれハすくる松風

花盛

さきてちるはなのよハひも程なきに
さかりの色に心とめつゝ

落花

すミわひぬ花ちる里のあれまくも
ありしにまさる春の暮かた

歇冬

おもひ川千しほの木葉と、まらて
あさき色せく山ふきの花

池藤

風ふけハ池のうき草方よりに
又かけさハく春のふちなミ

暮春

したハしよおもへハ夏の花鳥に
かハらむまての春のなこりを

夏十五首

更衣

をりいたすかとり乙めもひまやなき
けふもろ人のかふる衣に

卯花

木のもとの卯の花月の出入を
まちもおしまぬをちこちの山

待郭公

雲まよふいさよひの月の村雨を
まつまちいつるほと、きす哉

聞郭公

よしさらハあかすハ老のひかき、も
ましれとおもふほと、きすかな

郭公稀

うたたねのこれハ夢ちかほと、きす
をとつれたえし後の一こゑ

古郷橘

ふるさとの庭にのこりてたち花の
花にましハる身さへつれなし

早苗

うへはて、かへりミすれハみなと田の
秋のほなミハさなへにそたつ

五月雨

日をふれとわきてたまれる水もなし
はまのまさこの五月雨の比

鵜川

ますらおかう舟のか、りさしとくも
つなてくるしき後の世のやミ

蒸螢

ゐるほたる草のたもとにつ、ミても
もゆるおもひをけたぬ露哉

夏草

夏くさのしけミかうへのおもけよ（ママ）
霜かれはつる野への木からし

夏月

あけハおし我老らくのしろかミに
夏の霜よの月そやとれる

夕立

こりしけるみねの岩尾にわく雲の
山たちかくす夕たちの空

杜蟬

夏くる、日かけをのこすもりの葉も
秋に色つき蟬そなくなる

夏祓

おりふしもしらぬ田ミの、しま人も
けふハなこしのみそきすらしも

秋二十首

早秋

露やしるおもひしことに數こえて
なを身をしほる秋の初かせ

七夕

いくとせかならひきぬらむ七夕の
秋さりころもさらぬわかれに

荻風

玉さゝにおつるそそよく秋かせの
ふかぬ夕の荻の下露

萩露

さく花の色もうつさす萩の葉に
なにそハしける秋のしら玉

女郎花

風のまのきりの戸張にたちかくれ
野へおくふかきをミなへしかな

夕虫

草の葉にきゆる日影をかきりにて
ゆふ露またぬむしのこゑ哉

夜鹿

つま戀のこゑをしのふる道やなき
やミにかくれてをしか鳴也

初鴈

聲たつるかせもすさまし鴈なきて
菊のはなさく秋のはままつ

秋夕

露の身のうきを本にて世にふるも
たへぬすゑ葉の秋のゆふくれ

山月

いつるまの月のうちよりこゑそする
かねや生駒の峯の山寺

野月

月みにと遠さと人のくるもなし
うつろひかハれをの、秋萩

河月

天の川八十の渕せやわたるらん
遠きわたりのなかき夜の月

江月

見せハやな松の葉つたふ有明も
ほそえのハしにたかくのこるを

浦月

ふくるよのうらわをミれハもしほ草
しきつに月そ影をやとせる

籬菊

さく菊のまかきハしけくかこはねと
秋のと、まるせきとならすや

擣衣

ときあらひ衣うたせん人もなき
道ゆくま、に秋もへぬへし

曉霧

みねたかくのこる光そみたれ行
きりふりくたる在明の月

岡紅葉

日影みしをかのハし原色きえて
とをきかきねにもすの一聲

庭紅葉

岩かくれ汀のちりとつもるとも
かきもハらハし屋との紅葉、

九月盡

むかしみき篠をかさしてまふ人の
神をくりせしいつも八重かき

冬十五首

初冬

けふよりハ冬たつ空とおもふにも
くれやすき日のおしき老哉

時雨

たかさとの空にきゆらむ神な月
しくれもてゆく雲のとまりは

落葉

あらし吹空の木の葉の村立に
この比雲の行來をもミす

朝霜

手をさむミ袖のあさ霜まくりもて
ゆく人くもる遠かたの野へ

寒草

人ハこてかれのゝすゝき霜さむミ
今朝たにまねく色そつれなき

千鳥

なきさには立る有とや浪よらぬ
とをきひかたに千鳥なくらん

水鳥

いか斗寒けむ床そみつ鳥の
空にすき行あかつきのこゑ

氷初結

うすこほりけさみえそめぬミ草ゐて
なかるゝ川のよとむ所に

冬月

をく霜もこほれる影の物ことに
きしる音して深る夜の月

鷹狩

たとひ我かるへき身とハ生るとも
一も鳥をいかてたてまし

野霰

野をひろミ日影をわけてさゝの葉に
あられむら〳〵こほれてそ行

淺雪

朝くもりしハしふりきて道のへの
ちりもかくさすハるゝしら雪

積雪

つもるらし木〻の下おれをちこちに
ひまなき山の雪のくれ哉

閑中雪

雪のうちに鳴こゑせぬや村鳥の
はミこし水も今朝たゆるかに

歳暮

つもりきて雪の下折なき山も
松きるとしのおくそあれ行

戀十五首

寄月戀

うれへみる袖のなみたもハちぬへし
月の宮この人の心に

寄雲戀

きえせすは岩ほともなれもえはてん
煙のゝちのみねのうき雲

寄露戀

けさやみむかたしきけちてまきらハす
露のあまりの床のしら玉

寄雨戀

きくもうし身をしる雨といふほとも
なれえぬ中のまやのあまりに

寄山戀

石ハしる瀧なき山もおりわひぬ
へたつる花のかすミ斗に

寄關戀

かよひちとなさぬ翁もかミさひぬ
まもりくきたの關のくきぬき

寄海戀

つゐになと舟よせさらむ外海の
あらたつ浪にかせハなすとも

寄橋戀

あひみるもなかはハかなくたえそ行
しハしかけつけ夢のうきハし

寄木戀

ことの葉の色をミせても見なれ木の
めつらしけなき中やいとハむ

寄草戀

秋よりも露そこほるゝ時すきて
草を冬野とかれし契に

寄鳥戀

人のためあふ夜の鳥ハわするとも
わさとなかせて心みまほし

寄虫戀

君もしれむしのねからす秋の霜
かゝれとてしもをかぬ心を

寄獸戀

戀すてふ心なくしてけたものゝ
雲にほへけむかよひちもかな

寄枕戀

まくら香もわかのミつらし床の上の
こかのわたりハ舟もかよはて

寄衣戀

さ夜ころも中にありしも昔にて
かへすもみえぬ夢のかよひち

雜十五首

浦松

老か身のなき世の苔の下にふけ
これやかきりのうらのまつかせ

窓竹

まなひつる道ハあさくて一重見し
まとの竹のミふかくなり行

山家嵐

さましてもなにゝかハせむ夜ハのあらし
うき世もしらぬ山かつの夢

山家水

くミたゆる時こそハあれ岸つたふ
苔のしつくの山の井の水

田家

もる民もかりほの床のいねかてに
おもひやあかす年のなりハひ

古郷

名そのこるいつくをみるも古郷と
なれる所ハあとかたもなし
水郷
みつのおもにみゆるなにハの都鳥
昔や雲のうへにすミけん
關路
よせくるや上の〻むしももろこゑを
すまの關路の秋のす〻舟
海路
いかはかりあやうき波そあわち嶋
なくハ見もせむ瀬戸わたる舟
羇旅
と〻まらむ行をかきりの宿かさは
おもはすしらぬ野山なりとも
述懐
此世にハほまれある名も何かせむ
花に春かせ月もうき雲
懐舊
なからへき三たひ七日をつかへしも
十とせ七とせ神やうけ〻ん
神祇
いま祈心の道の一すちそ
神もまことにうけハ引へき
尺教
あさけれと此百種のことの葉も
みなわか國の法をとく也
祝言
國民もやすかれといのる事種よ
君ハ千世ませのたくひ成けり

文安六年三月廿三日酉時參
籠住吉社頭廿四日自早旦客
來等依事違其日晩頃始此百
首纔詠十五首一時斗廿五日
爲閑日雖取向自京都聊有
不例心仍爲平休六十三首詠
之廿六日集衆五十首法樂秘講図
廿七日病悩増気之間指置之
廿八日得少減相殘廿二首二時斗也
詠終也依有子細不返初一念
然間一首不得風情彼是一日三
時之百首也雖為比興併神法樂
懇志斗也更〻不可外見者也
招月庵主

〈定信の「住吉百首」〉

住吉百首和歌
立春
花のうへにいとはん物と思ふにも
こ〻ろうきたつ春のはつかせ
朝霞
住よしの松に聲なき朝なきに
かすミ色ある沖つ白波

谷鶯

雪氷とちしまゝなるたにのとに
をのれ打出て鶯そなく

殘雪

有明のゝこる斗の峯の雪
これもつれなき色をミす覧

若菜

七くさのいつも二はの心かな
かへらぬ年をつミそふれとも

里梅

うの花のさとの垣ねに先立て
白妙にほふ梅のひともと

鴛鴦

うつしうへしそのよを忍ふ友なれや
なれも老木の軒のむめかゝ

春月

春なから雪けの雲の朧つき
かすむとミても寒き影かな

春曙

老らくの深き霞のあハれまて
おもひこめたる春の明ほの

帰鴈

こえて行かりの名殘も末の松
姿ハなミのよそに霞ミて

春雨

そことなくかたらふ鳥の聲さへも
かすミにしめる春雨の空

岸柳

うき艸のかたよるあとにかけミえて
風に爭ふ岸の青柳

待花

限ありて咲へき物とおもひなハ
はなちる比もおしまさら南

初花

まちおしむうさを忘れて初花の
かた枝に春の心をそしる

見花

つく〳〵と花にむかへハ代ゝの人の
めてこし春の名殘さへそふ

花盛

さかぬまのうさも戀しく櫻はな
ちるほとちかき盛と思へは

落花

雪とミてあるへき物をちる花に
うたても風の匂ひぬるかな

歇冬

身ハなきになしても匂ふ山ふきハ
つかふる道のはなと社ミれ

池藤

池の面ハさくら山吹ちりしきて
たえまにうつる岸の藤なミ

暮春

老かミハ多くの春にわかれても
なれし心のけふとしもなし

更衣

世のひとの心の花のうつろふを

けさしも袖の上にミせけり

卯花

名こりしたふ春の高ねの白雲を
こゝにのこして卯木さくらむ

待郭公

もらさしと誰に契りてほとゝきす
たつなを空にかくおしむらむ

聞郭公

時鳥有明の空のむら雨ハ
なかむる方もなき行ゑかな

郭公稀

ほとゝきす花橘ハちりすきぬ
よかれし音をは何にまたまし

故郷橘

ふるさとの花たちはなハいつのよに
いつをしのひし袖の匂ひそ

早苗

雨まちしさなへハはやもふし立ぬ
うへにしかたの生たゝぬまに

五月雨

よにふるも程こそあれと獨聞
老のまくらのさミたれのそら

鵜川

是をのミつミとないひそあしろ木も
おなし川せにくたすうふねを

蒺藜

茂りあふ木の下くらき草むらハ
くれぬ先より螢とふ也

夏草

人目のミかるゝのもりか庵なれや
草をミやまのかくれかにして

夏月

霞なき空とおもへは明やすき
うらミそかゝる短夜月

夕立

雲きおふむこの山かせ吹落て
こゝも涼しきゆふたちの空

森蟬

秋ちかミしくるゝ森の聲よりや
色つくもりのけしきミすらむ

夏祓

こん年もことしのけふハなき物を
いかにいとひてミそきしつらむ

早炼

一葉ちるかけにおもへハこからしの
行ゑわひしき秋のはつかせ

七夕

あすよりハ歎つまなんたなはたの
稀の契の行合の杜

荻風

庭のおもの秋の千くさの色もかも
おもひ捨たる荻のうハかせ

萩露

けさミれはふる枝の萩の露おほミ
もとの心やけつかたもなき

女郎花

あたなりとおもへとめつる女良花
人の心も千くさならすや

夕虫

くるゝよりつゝりさせてふ聲すなり
たか夜寒をやわれに告らむ

夜鹿

夜やふけし月や出けん小男鹿の
遠きたかねの声の間近き

初鴈

心よせし春のミるめもわすれ艸
生てふ浦のはつかりのこゑ

秋夕

ともすれハ思ふことなきわかミをも
わすれてかこつ烋の夕くれ

山月

出るよりこのまあらはに影ミえて
月にくもらぬ岑の枩原

野月

露わけし跡とめてこそあこかれめ
月なき草のゝへのかよひち

河月

山めくる川せの末もはる〳〵と
月にかくれぬ水の浮霧

江月

住よしのまつの嵐に雲晴て
細江にあまる月の白妙

浦月

打むかふ心のはてもなかりけり
月かけ清き秋のうらかせ

籬菊

仰きミる南の山の壽を
まかきの菊につミやそへまし

擣衣

こぬつまをしのふ涙や乱る覽
碪の音のうちもつゝかぬ

暁霧

梢のミそれと斗ハほのミえて
霧に奥あるあかつきの庭

岡紅葉

夕日影ミねを隔て山鳥の
おかへのもミちいかに染けん

庭紅葉

めかれせぬ心に染て露霜の
ほかに千入の庭のもミちは

九月盡

露ハしもにむすひかへても袖上の
ぬれしを秋のかたミとやミむ

初冬

つゆ時雨よそに操の松かえも
あらしにしるく冬ハ來にけり

時雨

音もなくよにふる春にくらふれハ
けにうき雲のしくれ成鳬

落葉

此比ハとやまの木〻の聲絶て
庭のおちはに凩のかせ

朝霜

霜のうへに餌ひろふ鳥の跡ミえて
下の落葉の色もなつかし

寒草

野邊ハ今尾花斗と成にけり
ちくさは霜の下にしほれて

千鳥

神さひし宮居静にさよ更て
千とり鳴なり住よしのうら

水鳥

朝附日かけさすかたに水鳥の
眠ゆたけき池の中嶋

氷初結

朝とてに物忘れせし心かな
ミれはかけひの音そ氷れる

冬月

こからしの色なき風もミにそしむ
落はの霜に山端月

鷹狩

雲の上にしられね民の歎をも
手にとる鷹の御狩成らむ

野霰

雲氷る尾上の雪のやま風に
すその、はらハ霰ふるなり

淺雪

とハれしと思ひし物を淺沓の
あとよりやかてきゆるしら雪

積雪

さくとても松を絶まのはなのくも
か、らぬ山も雪のしろたへ

閑中雪

誰か又あとつくへきやおり立て
かきほの梅の雪を拂はむ

歳暮

くれ竹の一夜の春をいそくかな
は山につもる老ハおもはて

寄月戀

しらてミるそなたハ月もくもらしな
こひしき時に出るものとも

寄雲戀

契りしにあらぬ物から夕暮ハ
心の空に雲そたゝよふ

寄露戀

たまさかのあふよもおなし袖の露
ほさて別の鳥をきかなむ

寄雨戀

ふりしきる夜はの雨社うれしけれ
とハぬ恨をかけしとおもへは

寄山戀

ふミまよふ心よりして歎こる
こひの山ちに身をや捨まし

寄關戀

あふさかハよそにのミ聞中なれは
袖の清水にせきやすへまし

寄海戀

わか戀ハ何にたとへんわたつ海の

千尋の底もかきり社あれ

寄橋戀

いつ迄かつらきなからのはし柱
朽はてぬミを歎く斗そ

寄木戀

なくさむハこひせぬ人の春秋や
はなもミちにも思ひそふミを

寄草戀

わすれ艸生ふる軒はも夕暮ハ
おなししのふの露ハかけすや

寄鳥戀

思ふかたの便いかにと詠れは
とまりからすの聲さハく也

寄虫戀

とハれしと思ひ捨てし夕にも
心にかくるさゝかにのいと

寄獸戀

いハておもふ思ひをしれな鳴あかす
外山の鹿の聲をきゝても

寄枕戀

ねもやらてつもる枕のちりのミは
あるかなきかに人やなすらむ

寄衣戀

夢とても思ひの外にミる物か
なにゝかへさむよハのさ衣

浦袞

浪の聲も萬代よハんわたつ海の
ミとりにつゝくすミよしの袞

窓竹

君か代のちとせのかけを祈る哉
竹の起臥窓の明暮

山家嵐

馴ぬるや松のあらしのふかぬよハ
さすか友まつ山の下庵

山家水

苔清水たえなハたえね一方に
むすひとむへき山の庵かハ

田家

たのミさへわか物ならぬ賤や守
もらぬ賤のミ秋や樂しむ

故郷

八重むくらそれもいつしか枯果て
とりのね寒き故郷の庭

水郷

なにハ江のあし火たくやの光こそ
こやたか船のしるへ成らめ

關路

古の關ハいつこも秋のかせ
夜ハの月のミもり明しつゝ

海路

山といへハ限りこそあれ海原ハ
ちさとの外もひとつ波ちを

羇旅

故郷にまつらん袖の上までも
旅ねのよハの月にかたしく

述懐

老かミもやたけ心のひと筋ハ
たれにゆつるの譲るへきかハ

懐旧

おもふそよ新羅百済の國までも
わか日本の波かけしよを

神祇

ことのはのはかなき道の為ならぬ
心のおくハ神そしるへき

釋教

我國のひろき教の道なれは
佛の法もあるにまかせつ

祝

あひにあふ神と君との恵にて
いつこもひとつすミよしの里

ことし冬の比招月の
かいたる住吉百首てふ
ものを得てけれはその
題によりてよミ出て同く
納奉るものなり

文化六年十二月
越中守源定信

〔付記〕この稿を草するにあたり、正徹・定信の「住吉百首」の翻刻と写真掲載を御許可くださった住吉大社当局に対して厚くお礼を申し上げます。とりわけ、論中にも記したように神武磐彦氏からは絶大な御力添えを得たこと深謝に耐えない思いです。また、文字解読でお世話になった附属図書館の中野美智子さん、多くの学恩を与えてくださった田中新一氏にも各々お礼を申し上げます。

（昭和58年7月14日受理）